

高等女学校の研究

——一九二〇年代の教育実態をめぐって——

山本 礼子
福田 須美子

はじめに

現代日本の女子教育は、近代公教育体制のもとで展開してきている。その端緒を遡及すれば一八七二（明治五）年二月開校の官立女学校に求めることができる。その後今日までの百年あまり、種々の歴史的規定性を内包し、紆余曲折しながら歩みが続けられてきた。

本研究で取り挙げている女子中等教育機関としての高等女学校（主に公立高等女学校）は、旧制度の教育体系の中で、日本の女子教育の中核的役割を担ったのであった。

高等女学校の歴史は、一八九九（明治三二）年の高等女学校令をもって正式発足と看做し、それ以前を前史・萌芽期とみる。制度的に確立するや、急速度に女子中等教育機関が設立され、就学人口は増加する。一九二〇年はまさに、普及・拡充の時期である。しかし、この女子教育機関としての別学体制は、一九四七（昭和二二）年の旧学校制度の廃止をもって終焉する。従来の研究では、政策史・制度的研究を中心に進められているが、高等女学校の実態研究は殆んど未開拓であるといえよう。

本論は、一九二〇年代の高等女学校、とくに公立高等女学校を中心に、そこで実際に行われていた教育内容および教育方法の実態を浮彫りにすることを目的とした。そのために、各学校の学校史、記念誌、同窓会誌および聞き書きを主な資料とした。この時期は、第一次大戦前後の経済発展や、いわゆる大正デモクラシー等の思潮により、量的増大のみならず、質的に大きく変容している。そこで時

代を反映している教育内容・方法に力点を置いて論述する。

一、一九二〇年代の高等女学校の教科課程

女子中等教育を男子の中学校から独立したものとする方針で、高等女学校規定が明文化したのは一八九五(明治二八)年のことであり、教育内容を法制上明示したのはこれが初めてである。

「高等女学校令」は、これより四年後、一八九九(明治三二)年二月八日に issuance、ついで、同月二日に「高等女学校ノ学科及基程ニ関スル規則」を定めた。二年後の一九〇一年三月二日「高等女学校令施行規則」が、一九〇三年三月九日に「高等女学校教授要目」が出される。このように、矢継ぎ早に女子中等教育関係の法令を出し、その基盤を確立しようとしたのである。まさに、女子中等教育の黎明期といえよう。

表1 高等女学校入学者数

年	入学者数	増加指数
1899	1,998	100
1900	2,991	150
1901	4,214	211
1902	4,927	247
1903	5,900	295
1904	6,506	326
1905	7,157	358
1906	8,037	402
1907	9,190	459
1908	10,459	524
1909	11,179	560
1910	12,038	603

注) 文部省年報より作成

表1にみられるように、女子中等教育機関としての高等女学校への進学率は、急速に高まり、それと共に地方村落の女子にふさわしい主婦養成を目的とする教育機関として、実科高等女学校が設置される。それが一九一〇(明治四三)年十月二六日の高等女学校令中改正である。

その後十年間は、教科目の授業時数の変動に伴う改正はなされるが、大きな動きはない。

一九二〇(大正九)年七月六日「高等女学校令中改正」は、一九一七年九月に設置され、一九一九年五月に廃止された臨時教育会議が、内閣直属の諮問機関として、女子教育に関して答申したものを受けて出されたものである。

まず、高等女学校の目的を、「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」との従来の規程に加え、「特ニ国民道徳ノ養成ニ力メ婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」とした。修業年限は五年を基本とし、四年、もしくは事情によつては三年も認めた。さらに「一層精深ナル程度ニ於テ女子ノ高等普通教育ヲ授クル途ヲ開クモ亦時勝ノ進運ニ伴ヒ必要ナルヘシ」として、高等科の設置を認可したのであった。

表3 高等女学校令施行規則
改正（乙号表）

学年 学科目		1	2	3	4
修 国 外 歴 地 数 理 図 家 裁 音 体	身	2	2	1	1
	語	6	6	6	5
	語	3	3	3	3
	史	3	3	2	2
	理	2	2	3	3
	学	2	2	3	3
	科	1	1	1	
	画			2	4
	事	4	4	4	4
	縫	2	2	1	
	楽	3	3	3	3
	操				
計		28	28	28	28

注）随意科目は甲号表に同じ。

表2 高等女学校令施行規則改正
（甲号表）

学年 学科目		1	2	3	4	5
修 国 外 歴 地 数 理 図 家 裁 音 体	身	2	2	2	1	1
	語	6	6	6	5	5
	語	3	3	3	3	3
	史	3	3	3	2	2
	理	2	2	3	3	3
	学	2	2	3	3	3
	科	1	1	1	1	
	画				2	4
	事	4	4	4	4	4
	縫	2	2	1	1	
	楽	3	3	3	3	3
	操					
計		28	28	28	28	28

注）随意科目は外国語・図画・音楽で教育、法制及経済・手芸・実業が加設された。

表5 乙号表にそった例（青森
県立弘前高等女学校）

学年 学科目		1	2	3	4
修 国 英 歴 地 数 理 図 家 裁 手 音 体	身	2	2	2	2
	語	6	6	6	6
	語	3	3	2	2
	史	3	3	2	3
	理	2	2	2	2
	学	2	2	2	1
	科	1	1	1	1
	画	1	1	3	3
	事	7	7	7	7
	縫	1	1	1	1
	芸	2	2	2	2
	楽	3	3	3	3
	操				
計		33	33	33	33

表4 甲号表にそった例（大阪府立
梅田高等女学校）

学年 学科目		1	2	3	4	5
修 国 英 歴 地 数 理 図 家 裁 音 体	身	2	2	2	2	2
	語	6	6	6	5	5
	語	3	3	3	3	2
	史	1	2	2	1	1
	理	2	1	1	1	1
	学	2	2	2	2	2
	科	2	2	2	2	2
	画	1	1	1	1	1
	事				3	4
	縫	4	4	4	6	6
	楽	2	2	2	1	1
	操	3	3	3	3	3
計		28	28	28	30	30

表6 乙号表にそつた例(千葉県立木更津高等女学校)

学年		1	2	3	4
学	科目	1	2	3	4
		1	2	3	4
修	身	2	2	2	2
国	語	6	6	5	5
英	語	(3)	(3)	(3)	(3)
歴	史	1	2	1	2
地	理	2	1	1	1
数	学	2	2	2	2
理	学	2	2	2	1
図	画	1	1	1	1
家	事			2	2
裁	縫	10	10	10	10
音	楽	2	2	2	2
体	操	3	3	3	3
計		31	31	31	31

施行規則の改正により、「高等女学校ニ於テハ高等女学校令第一条ノ旨趣ニ依リ生徒ヲ教育シ殊ニ国民道德ノ養成、婦徳の涵養ニ関連セル事項ハ何レノ学科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授センコトヲ要ス」と婦徳の涵養に注意が払われている。また、「教育・法制及経済、手芸又ハ実業ヲ加ヘ、其ノ他文部大臣ノ認可ヲ受ケ必要ナル学科目ヲ加ヘ」、「随意科目又ハ選択科目」とした。同時に各学科の教授時数を変更し、数学・理科の授業時数を増加し、理数科教育を重視しようとする動きが察せられる。

そこで、一九二〇年代の高等女学校の教育課程を概観するために、文部省で定めた学年別標準時間数(五年制は甲号表、四年制は乙号表)を表2・3として掲載する。ついで、第一高女型といわれる「高等女学校令」一期に設立された学校の事例と、従来の四年制を踏襲した地方都市型の事例と、さらに実科高女から高女に昇格した事例を挙げてみよう。

表7 中学校令施行規則中改正(1919)

学年		1	2	3	4	5
学	科目	1	2	3	4	5
		1	2	3	4	5
修	身	1	1	1	1	1
国	語	8	8	6	5	5
外	語	6	7	7	5	5
歴	史	3	3	3	3	3
地	理	4	4	5	4	4
数	学	2	2	2	2	4
博	物			2	4	4
理	理				2	2
法	制					2
実	業	1	1	1	1	1
図	画	1	1			
唱	歌	1	1			
体	操	3	3	3	3	3
計		29	30	30	30	30

標準時数の二倍となっている。そのため、英語・数学・理科を高学年で減じてはいるものの、総時間数が最大限の三三時間となる。さらに実科高女から昇格した千葉県立木更津高女(表6)では、裁縫一〇時間と大幅に増し、英語は随意科目としている。それぞれ地域の実情にあわせて、教育課程を吟味している様子が垣間見られる。

当時の中学校の学科目ならびに標準時間数(表7)と比較すると、男女別学路線が歴然とする。修身は高女の半分、国語は漢文も含め

第 8 高等女学校・実科高等女学校の学校数および生徒数の変化

年 次			1915	1920	1925	1930
学 校 数	高 等 女 学 校	官 公 立	164	260	459	548
		私 立	59	76	159	222
		計	223	336	618	770
	実科高等女学校	官 公 立	125	150	162	186
		私 立	18	28	25	19
		計	143	178	187	205
	合 計	官 公 立	289	410	620	734
		私 立	77	104	185	241
		計	366	514	805	975
	増 加 指 数		100	140	220	266
生 徒 数	高 等 女 学 校	官 公 立	58,941	95,432	205,232	254,282
		私 立	16,889	30,156	70,591	87,292
		計	75,830	125,588	275,823	341,574
	実科高等女学校	官 公 立	17,370	21,072	21,116	23,147
		私 立	2,747	4,628	4,508	4,278
		計	20,117	25,700	25,624	27,425
	合 計	官 公 立	76,311	116,504	226,348	277,429
		私 立	19,636	34,784	75,099	91,570
		計	95,947	151,288	301,447	368,999
	増 加 指 数		100	158	314	385

注）文部省年報より作成

て低学年で二時間増、さらに顕著な差は、外国語が倍の時間で六時間、数学の二時間増などである。

なお、一九一五年から五年おきに、高等女学校、実科高等女学校の官公立、私立別に学校数・生徒数を表示する(表8)。一九一五年を基準にすると一九二〇年末で学校数で二・六倍、生徒数で三・八倍となっていく。

二、教育内容の特色

一九二〇年代になると、教育課程が各地の事情により多様化してくるとともに、当然のことながら、その内容にも変化が生じてくる。学校史、同窓会誌の記録にもとづいて、教科ごとにその変化を追ってみよう。

1 修身

臨時教育会議においては、「婦徳の涵養」ということが重要課題とされ、この点に留意した修身の授業が行われる一方で、「女性の自覚」を説く教師が出てくる。修身は、校長が受け持つ場合が多く、校長の教えに影響を受けた女子学生も少なくない。「これからの女といふ事を考える時、すぐ頭へ浮んでくるのは、いつも校長先生のおっしゃる『女気を離れて』といふ事である。……これからの女は、内気な遠慮勝な所謂女気を去って、学問に修養に体育に努めなければならぬとつくづく感ずるのである」⁽¹⁾とは千葉県東金高女の森田校長の言葉に啓発された女生徒の作文である。

開明的な校長では東京府立第一高女の市川校長が知られている。「およそ婦人には三つの型がある。第一の型は結婚して家庭に入り、夫に従い、いわゆる良妻賢母になれるもの、第二の型は、仕事を主とし、家庭に入らず、生涯独身で社会的活動を行う型、第三の型は結婚し、家庭と仕事を両立させながら、社会的活動を行うものである。そのどれを選ぶのも個人の自由であり、各々自己の責任において個性を伸ばすべきである」⁽²⁾と個性の尊重を唱い、男女同権、婦人参政権の獲得を論じることもあったという。

第一次世界大戦後の社会不安を配慮して、修身の授業で思想問題に言及することも多くなった。「修身の時間を利用して思想問題をとりあげ、家族主義(封建)、国家主義、自由主義、個人主義、社会主義、民主主義、共産主義のそれぞれの性格・方針・長所・短所を分類してご説明されました。それは教科書にはないのですが、私どもには興味深い教材となつて、一段一段と視野を展げた喜びを感じたものです」⁽³⁾とは弘前高女、永井校長の修身により、思想的な視野の広がりを得られたと語る女学生の弁である。

京都府立第一高女に学んだ一人の婦人は、一九八〇年の読売新聞日曜版に母校の様子が連載された時、つぎのような覚え書きを残している。⁽⁴⁾

「五代目大石校長（大正六年―一四年）で府一のムードが大きく変った。『人間は顔かたちで判断するものではない。勉強して中身をみがけば美しくなるものだ』『摘出子の女子が庶子の男子より下位ということは男性上位の法律だ』と旧民法の相続の矛盾を指摘さらに『男がつくった法律だからで、男女平等を改めなければだめだ。それには女子も男子と同等の教育を受けねばならん』と教える。『婚姻の話の時、絶対に結婚式と同時に入籍すること、多くは結婚式のあとで嫁の入籍をする風習があるが、それは絶対にいけない。』とこれは強く主張して教えて下さった。乙女の私はほんやりと実感が伴わなかったけれど、先生の熱意ある語調に強い感銘をうけたことを記憶している。大石は『法律と経済』と題した自著の教科書を使い、修身は女性の人權の高揚を説いた。補講の時間は、種々の文学をとりあげ、また芸術をとく。とくにフランスの文豪ビクトル・ユーゴー『わしはユーゴーが好きじゃ』と言いきる。真善美を平易に説明し、人間の生き方を文学作品を通じて生徒に教えるとしたのだ。」

修身という教科を通し、校長の人格が如実に生徒の前に披瀝されている。

2 国 語

従来、模範に従って読む、書くこと中心に進められていた国語の授業も、一九二〇年代に入ると、教室内在が活気を帯びてくる。「教卓を中にコの字型に机をならべ、ディスカッションが主であった。教科書は中学校用を使用。各机ごとに学校の備品として広辞林、大字典が備えつけてあって、不明の点を質疑応答した。作文は重視されて、一週一度月曜に提出、文集にしてとじ、批評欄に皆の読後感を書くよう決められていた⁽⁵⁾」という大阪府の梅田高女のように、話すことにも目が向けられてきた。

自分の考えを話す、そして綴る。梅田高女の場合のように、文集作りは全国的に盛んになったようである。「時には原稿用紙一枚にもわたって赤いインクで先生が評を書いて下さった。それが嬉しくて嬉しくて、いつしか書くということが身につき、書くことによって自分自身をみつめ確かめる習慣をつけていただいた⁽⁶⁾」（長野県諏訪高女）というように、教師の指導にも熱がこもる。

また読書指導も採り入れられた。「当時の女流作家、中条百合子、野上弥生子等の作品を教室で紹介されたりして、大いに読書欲を高めて下さいました⁽⁷⁾」（山形県酒田高女）こうした文学熱は、教室内に留まらず、部活動にも反映する。「私は学芸部委員であった関係で、

月に一回の『明星』という文集の編集をしましたが、詩あり、歌あり、随筆あり、日記ありで結構楽しいものが出来ました⁽⁸⁾」(熊本高女)という風に文学少女が誕生する。

昭和六年、埼玉県立浦和高女を卒業した一人の生徒は、在校中国語の副読本として用いた『明治大正の文学』と題しての十冊の本を前にして、それぞれの作品を読み、先生の解釈を聞き読後感を提出したことを熱っぽく語る。一号は現代文学思潮概略であるが、二号以下九冊は、高山樗牛、落合直文、尾崎紅葉、樋口一葉、国木田独步、菊地寛、久米正雄、島崎藤村、芥川龍之介、山本有三の作品が掲載されている。その間に、日本文学史、欧州文学思潮史、さらに謡曲、狂言も加えられている。これらは浦和高女で編集し、生徒に教材として提供していたものである。高女時代に培かれたものが、高齢になった今も、自己を生かし、情緒豊かな生活を形成していると言えよう。

3 英語

実科高女では英語が置かれなかったが、高女への昇格の際に随意科として履修させるケースが多かった。いずれにしても、英語は必ずしも正課ではなかったが、一九二一(大正一〇)年の文部省調査によると、正課として設定した高女一〇校、随意科として選択履修が一八九校であった。五年後の一九二六(大正一五)には正課四九七校、随意科一一四校(いずれも私立を含む)となり、急速に履修者の間口が広がってきた。

宇都宮高女の津川校長は、「現代の文明を理解し、之に適應して生活し得るだけの能力と体力を具へなければならぬ⁽¹⁰⁾」とし、そのために英語は必須であることを校友会の会報で訴え、一九一五(大正四)年に英語の授業を正課に変更している。世界の「二等国」という意識が高揚してくるに従い、英語の学習も奨励されるようになる。学校史等の記録には、英語が登場した時の印象などが多く綴られている。

一九二〇(大正九)年、高女昇格とともに英語が採り入れられた栃木県真岡高女では、「教科内容が変った中で特に英語が入ったのは印象的で、簡単な英語劇などをし、……初歩的なものであったが、本科生になった実感と未知の世界をのぞいた思いを持った⁽¹¹⁾」高女一回生、また、「三年になってやっと英語が出来る喜びは格別でございました⁽¹²⁾」(愛媛県西条高女)などの回想が寄せられている。

静岡県富士高女のように、一九一九(大正八)年、「英語の授業開設等を求め生徒半日の同盟休校事件起こる⁽¹³⁾」との記事が残されてい

るところもある。

一方で、「英語の成績の悪い方は、英語の時間になると、お裁縫の道具をかついで特別自習室に行ったものです。子どもながらに差別待遇されるようで非常に憤慨したものでございます」(千葉県安房高女)と嘆く者もあった。また「誰も英語へ入る人が居なくて、誰か行け行けと名指しで英語の方へ入れられた」(埼玉県小川高女)という者、「裁縫は材料費が大変だ」(16)という理由で英語を選択した者(熊谷高女)、事情はまちまちであるが、選択したからには徹底してやらせようと外人教師を招いた東京府立三田、福島県立相馬、山口県下関高女の例、宣教師に師事し英語を学んでから教壇に立った女教師(島根県松江高女)の例もある。

それだけに、「英語の時間には日本語が禁じられ、応答すべて英語」(福島県相馬高女)と大変だったが、その分印象に残っていると語る卒業生、授業の中で「オールドブラックジョー」などの歌や詩を暗唱(18)したという思い出を持つ者も多い。

4 理科

講義中心、知識重視の授業から、一九二〇年代に入ると、実験・採集に力が入られるようになる。それに伴って、理科室が普及してくる。「新装成った理科教室は、準備室を持つ階段式教室で、教師の手許がよく見え、数人で囲む机はグループ学習にも適した。実験実習器具も完備され、注入的、抽象的きらいのあった理科教授に、大きく貢献した」(鳥取高女)のである。(19)

新しい教育方法にとまどいながら、教師達は、設備に、器具に、材料に、一方で教案作りに試行錯誤の日々だったようである。新しい動きは印象深く当時の教師の胸に刻まれている。「今日は実験をしますから用意なさい!」と言うと、生徒たちは手をたいて大よろこびでした。その時のようすが眼前に浮かんできます。……教卓はたいへんに長く、かつ幅も広く、じゅうぶんに教授実験をして見せたり、標本や模型を並べる余地がありました。……『実験の準備をなさい』と私が言うと、学生は教室の机を二つずつ向い合わせに並べ、その中央に硝子水槽と試験管立てを置き、当番は準備室に薬品箱を取りに来る。そしてその日に使う小ビン入りの薬品や実験器具を準備室から臨時の実験台に並べます。その時間にやる実験の意義、やり方をよく注意し、何回も復誦させるくらいまで了解させてから始めました。いざ実験をはじめたら、専心に現象を観察することにつとめてもらいました」(20)とは群馬県沼田高女の元教師による満州事変前後の回想である。ここ沼田では、当時バザーに生徒達の作った化粧水やクリームを売って好評を博したりもしたという。

一方、野外では採集が盛んであった。「一学年では植物の研究に随分時間を費して野外を歩きました。……二学年では生物の種々の勉

強のうち、印象に残りますことは貝類を採集するために、田圃にたにし、小川に鳥貝等を求めてよく行ったものでした。そして解剖することを学び、だんだんと魚類、蛙までにも及んで悲鳴をあげながらメスを使ったことを覚えていきます⁽²¹⁾。(石川県大聖寺高女)を語る。

5 家事・裁縫

理科における実験、実習の重視の傾向は、家事科の中にも現われてくる。実習設備を持つ家事室、文化的な割烹室が普及するののも一九二〇年代後半からである。設計にも立合った当時の教師は、「第一 少人数で実習出来、実習効果の上るように、第二 作業能率の上るような主要部の構造と配置、第三 給水、排水よく、清潔にし得るよう、第四 防火、第五経済的を重点として乏しい能力をフルに働かせて設備した⁽²²⁾」(千葉県安房高女)という。

「婦徳の涵養」という点からか、割烹の実習等に「主婦」の役割を体得させることも加味された。「四年生になって、そろそろ卒業も間近になった頃、割烹の実習で、主婦役、給仕役、調理係と、それぞれ分担して、先生や父兄を御招待した⁽²³⁾という山形高女。マッサージの実習なども喜ばれる主婦ということを配慮してのことであろう、「女学校でマッサージ教わっておいて本当によかったと思います。無理にオシウト孝行をして……先日同級会がありましてみんなそういつていました⁽²⁴⁾」(埼玉県小川高女)との話には予期せぬ教育効果のほどが窺える。

食物の分野では、「栄養分析」、「カロリー」という用語が出てきたり、カレーライス等の洋食メニューが登場するものこの頃のことである。

住居については、洋風の台所、応接間、書斎のある文化住宅が教材として出されてくる。「健康住宅の実地見学を行った。私は四季の通風、採光や土質を考えてみた。子供本位であると同時に、働き盛りの主人の立場をも顧慮してみた⁽²⁵⁾」(尼崎市立高女)と主婦の目から見た住宅設計を試みている。

裁縫の時間は、和裁が主で、高女によつては来る日も来る日も、「早縫い」等で追い立てられていた。回想のなかには、裁縫に悩まされたという記述を多くみかけるが、それにより、「裁縫は今でもはつきりと私の縫物の基礎になっています。このお蔭で私は別に和裁を習いに行った事もございませんが、娘が結婚する時等、紋付も喪服も訪問着もそれに洋服全部私が縫って持たせました⁽²⁶⁾」(石川県大聖寺高女)というほど身についた例も少なくない。上級生になると、洋裁が入ってくる。出始めた国産ミシンや電気アイロンがいち早く取り入

れられ、新入生の夏の制服を上級生が縫うという学校も多かった。「洋裁は子供服や新入生のジャンバースカート等も縫って割合忙しい思いをしました」⁽²⁷⁾（愛媛県西条高女）との回想はそのことを裏付けている。

6 音楽

ピアノの普及により、音楽教育は従来のもものとがらりと変わってくる。千葉高女のように開校早々からドイツ製のグランドピアノを備えつけたところもあるが、一般的には一九二〇年代に購入した高女が多い。

在校生、卒業生による募金や寄付が資金となり、当時約二千元のグランドピアノを購入するというのがよくあったようであるが、変わったところでは、さくらの花を道ゆく人に売るという「花売り」⁽²⁸⁾を同窓会が音頭を取って行なったという山口県下関高女の例もある。

ピアノのお披露目の記念音楽会を手初めとして、数々の音楽会を通じて地域にも開かれていった音楽。「初めて耳にしたピアノの音に恍惚とした思いを今も忘れることが出来ません」⁽²⁹⁾（山形県谷地高女）と、音楽に触れた感激や「四部合唱『流浪の民』を校内コンクールで歌ったよろこび」⁽³⁰⁾（福島県相馬高女）、「毎週の音楽の時間が無上の楽しみで、音楽室の窓から首をさしのべて先生のお出を一同待ち遠しいものに思いました」⁽³¹⁾（鳥取高女）などの回想は、音楽への率直な感動を語るとともに、コーラス、演奏会等を通して仲間が広がっていくことへの喜びを伝えてくれる。

「タンホイザーの『巡礼の合唱』等を配したプログラムに依って『童謡音楽会』を主催、町民の方々の絶大な支援を頂き、それによって当時としては得がたいビクターの蓄音機及内外のレコード多数備品としてそなえ、鑑賞用に役立てたことは画期的なことで、生徒達は世界の名曲を教養として心に植えつけることが出来た」⁽³²⁾（山形県酒田高女）のである。

このように内外の希望により催された音楽会は、特に文化的な催し物に接することの少なかった地方に於いては、一種の清涼剤となったり、高女への憧れをかき立てる場ともなっていた。

7 図画

「どんなものにも美がある。……その美を自分の目で見つけださなければいけないね」⁽³³⁾（長野県諏訪高女）に見られる、「個」の持つ美の発見への誘いは、描き手の個性を引き出すことでもあった。

お手本通りに描くことが主流であった図画も、水彩絵の具にクレヨンを加え、自由画へと向かう。

「お若い美術学校を出られたばかりの村上梅子先生が、楽しい画をかく時間を作って下さいました。花園に出ての写生などそれまでになかったことです。」(愛媛県西条高女) 嬉々として戸外で絵筆をとる女学生の楽しそうな情景がくりひろげられていった。

作品展、展覧会が盛んになるのもこの頃のことである。また教師の間にも創作意欲旺盛な方が多かつたようである。「図画の中西先生……お若いのに個展を或る寺院にて公開されたことがあり、実にお立派なもので、大評判であつた」(新潟県柏崎高女)とか、都市周辺部では、「明治節には式の後上野まで文展を見に連れて行って下さり、小磯良平の絵などに感激いたしました」(埼玉県熊谷高女)との想い出が残されている。美術鑑賞を通して生徒の鑑識眼を高め、豊かな美への世界へといざなう教師の姿が描き出されている。

8 体 操

質実剛健の気風が高まるなか、女性の体力、体位向上は、「よい母」になるためにも、また先進国の女性に伍していくためにも重要であるとの観点から、体育に力が入られるようになってきた。

それまでは、貞淑な女性育成ということで、概して遊戯的色彩の濃かつた体操は、一九二〇年頃を境に近代スポーツへと形を変えてゆく。陸上競技にテニス、バスケット、バレーボールなどの球技、水泳等が盛んになる。「一学生一運動主義がとえられ、テニスをはじめとする女学生のスポーツ熱が高まつた」(37)という栃木県足利高女や、「初代仲原校長は、体育を非常に奨励され……私も陸上競技部に籍を置き、夏休みも冬休みも練習に励んだものです」(38) (岡山県和気高女)に見られるスポーツ熱は、一九二四(大正一三)年の第一回神宮体育大会を皮切りに、毎年全国大会が行われるようになって頂点に達する。学校史等には、市大会、県大会、全国大会へ出場した生徒達の苦しくも楽しかった当時の栄光の日々について、多くの回想が寄せられている。

球技の普及によって、運動系の部活動も盛んになり、放課後の運動場も活気を帯びてくる。「親密度を深め育ててくれたのが、部活動だったと思う。当時我が母校は、県下でも知られ、バレーボール部の活動が盛んであつた」(39) (宮崎県小林高女)というように、それまで同じ目的に集団で取り組むという経験の乏しかつた女学生達に、スポーツを通しての連帯感・親密感を育てた。

雨天体操場もこの頃から設置され始め、体育の振興に一役買った。各種競技会や運動会に加え、季節によって水泳や登山などの体育行事が加わった。「大正期から昭和二年まで……テニスの練習会が毎年実施され、千葉の海岸や五行川での水泳練習、薙刀講習会が開かれた年もあつた。昭和三年からは男体山、那須岳または赤城山などへの登山もはじまつた」(40) (栃木県真岡高女)との記録がある。

三 教育方法の特色

各教科の内容的な変容を中心にみてきたわけであるが、教科の枠を超えて、この期の高女教育の方法上、特に重視されたこととして、「自学」「自治」ということがある。この二点に絞って教育方法上の特色をみてみよう。

1 自 学

学校史のなかで早い時期に「自学」が取り上げられているところでは一九一九（大正八）年の大阪府梅田高女の例がある。「藤堂忠次郎校長……自学自習の強調である。自らも屢々授業も参観し、専ら生徒の自発的勉強を強調した。為に試験も学年末の一斉考查を止め、授業の始め約十五分間に不意に行うというやり方であつた⁽⁴¹⁾」という。自発的学習ということについて千葉県東金高女では、一九二〇（大正九）年の会報に「先生が居らなければ勉強が出来ないというやうではだめです。わからぬ事、疑わしい事は進んでずんずん質問して居られるでせうか。その質問もわからぬからすぐたづねるといふでなく、自分でよく考えてから先生に質問し、書物で調べるといふやうにしたいものです⁽⁴²⁾」と勉強法が載せられている。

「自学」の時間もいろいろで、「三年生（一九二三年＝筆者）の時、自学自習がとり入れられ、週一回各自得意の教科を選び、日頃あこがれている先生の教室で勉強しました⁽⁴³⁾」（新潟県長岡高女）というように、得意教科を伸ばす形のものや、「一・二年生は主として正課を予習し、三・四年生は予習復習の他に、国語、英語、数学及びその他一般学科の四班に分かれ、各自が指導を受けたい学科の先生の許で自由に質問研究が出来るようにしている⁽⁴⁴⁾」（栃木県真岡高女）というような予習復習に重点を置く形をとるものがあつた。

また徹底して実施した例として、熊本県第一高女におけるダルトン・プランが挙げられる。一九二三（大正一二）年吉田惟孝校長は、一月から試行し、新年度四月から全学年で実施した。教師が指導案を作成し、生徒は四週間単位の個人別進度表を作り、教師と学習内容、進度を契約するという形で進められ、ダルトンにあてられた日の午前中の四時間を自分の好きな教科を自発的に学習するというものであつた。この学校では口頭試験のテストを実施し、できない時は、勉強して再び受験するといった方法や提出物による進級査定が行われている。通知表とか席次の公表はしていないが、成果の如何によつて原級に留めるといった措置がとられている⁽⁴⁵⁾。

熊本県立第一高女・大正十二年度におけるダルトン案実施の学科及び時間配当⁽⁴⁵⁾

学年	学科	国語	数学	歴史	地理	理科	計	週回数 (午前中)
1			二 1	二 1			四	1
2			二 1		二 1		四	1
3		二 3	二 1	二 0		二 1	八	2
4		二 3	二 1		二 0	二 1	八	2

アラビア数字は学級整理学習、漢数字はダルトン式学習、両方の合計が県規定時数。学級学習の時間を残したのはその長所を加味するため。ダルトン式の時数を二時間としたのは、時間と労力なるべく均等に費し、一学科に甚だしく偏する弊をさげんがためである。地・歴は一年分を半年交替にする。

ダルトン式学習は、福岡県朝倉高女でもみられたが、授業時数が限られていた。「大正十二年六月一日から各組の教室を各教科教室に変更し、毎日第六時限を自由自学の時間とする事が始まった。……各教室には書棚が設けられて生徒自習用の参考書が、御成婚記念自習文庫と銘うたれて、ぎっしり並べられていました。これは本校が県下にさがけてダルトン式教授を実施し、学校を挙げて自学自習に徹していたためで教頭…、歴史…、地理…、物化…の先生等は特に御熱心だったようにお見受けしました⁽⁴⁶⁾」との元教師の回想がある。このように全国で各種の「自学」が行われていたが、一般的には、進んで学習するという習慣の育成に重点が置かれていたようである。

2 自治

一九二二(大正一〇)年九月、千葉県東金高女に全校生徒自治団が作られることになった。各組から代議員五名が選出され、生徒間で問題になっていることを協議するのである。例えば「言葉遣ひを直す良法はないでせうか」、協議の結果、「言葉遣ひを直す良法としては、(1)言葉は標準語によることにしませう。(2)互ひに忠告し合ふことにしませう。(3)教室内の質問応答で言葉が不明瞭の時は「わかりません」といって聞きなほすことにしませう⁽⁴⁷⁾」というような具合である。

東京府立第五高女では、一九二三（大正一二）年度から週一回「照顔会」が開かれることになった。「四年生を中心に各級選出の二名から成るこの会は、極めて民主的な自治機関で、生徒たちの守るべき諸規則は生徒たちで作れという当初の方針のもとに生まれた⁽⁴⁸⁾」ものである。

群馬県渋川高女の「自治訓練」、栃木県足利高女の「全校自治委員会」、大分高女の「自治会」等の組織が二〇年代前半に、相次いで生まれている。

自治会とは異なるが、神奈川県平塚高女の場合は「自彊団」（一九二六年）という名称の組織をつくり「校外訓練の機関として通学組織を設け、系統的に自治の精神を以て和衷協力、長幼輔敬の実を体得せしむる目的⁽⁴⁹⁾」をもっていた。「自治」とはいうものの、和を重んじた自主規制のための組織となっている。

当時の「自治」は、平塚高女の例にみられるような側面をも内包した、規律を重視するものであったようである。

むすびにかえて

高女の実態の概観から、この期の特色は次のようにまとめられる。

- ① 修身の授業等を通じて、新しい思潮に触れ、自らの生き方を考えるようになった。そして考えた事を、国語等の中で書いたり、話したり、また読書したりすることにより深める機会が得られた。
- ② 英語の普及により、西洋の文化に触れ、世界が広がっていった。
- ③ 理科や家事を中心に、実験、観察、実習が採り入れられ、科学的思考、実際の活用が目が開かれていった。
- ④ 図画や音楽等の芸術教育により、テクニックの面のみならず情操面での豊かさを増すと同時に、表現力を培った。
- ⑤ 体育の振興により、体力の向上が図られたのはもちろんのこと、スポーツを通じて共に学びあうという体験をした。
- ⑥ 施設、設備（理科室、家事室、音楽室、図書室、雨天体操場等）のが整うことにより、授業が充実していっただけでなく、地域の文化センターの役割を果たした。

- ⑦ 「自学」「自治」により、自発的に学習する態度、規律を重んじる気風が養われた。

注

- (1) 千葉県立東金高校『東金高校の歴史』Ⅱ 一九八〇
- (2) 服部直人『校友市川先生追悼号』鷗友学園 一九四〇
- (3) 青森県立弘前中央高校『八十年史』 一九八〇
- (4) 京都府立第一高等女学校大正十三年卒業 田中サダ氏
- (5) 大阪府立大手前高校『七十年史』 一九五八
- (6) 『長野県諏訪二葉高等学校 七十年史』 一九七七
- (7) 山形県立酒田西高校『有燭』 一九七八
- (8) 熊本県立第一高校『しらうめ八十周年記念特集号』 一九八三
- (9) 埼玉県立浦和高等学校 昭和六年卒神戸実枝子氏(聞き書きは埼玉大学新井淑子が行った)
- (10) 栃木県立宇都宮女子高校『二〇〇年史』 一九七六
- (11) 栃木県立真岡女子高校『七十年史』 一九八一
- (12) 愛媛県立西条高校『八十周年記念誌』 一九六八
- (13) 静岡県立吉原高校『嶺朋』 一九八四
- (14) 千葉県立安房南高校『創立六十周年記念誌』 一九六八
- (15) 埼玉県立小川高校『教育の証言』 一九七八
- (16) 埼玉県立熊谷女子高校『鈴懸とともに』 一九八一
- (17) 福島県立相馬女子高校『相女七十年』 一九七八
- (18) 千葉県立大原高校『創立五十周年記念誌』 一九七九
- (19) 鳥取県立鳥取西高校『鳥取西高百年史』 一九七三
- (20) 群馬県立沼田女子高校『沼女五十年』 一九七二

- (21) 石川県立大聖寺高校『七十年史』 一九八〇
- (22) (14)に同じ
- (23) 山形県立山形西高校『創立八十周年記念誌』 一九七八
- (24) (15)に同じ
- (25) 尼ヶ崎市立尼ヶ崎高校『六十年誌』 一九八一
- (26) (21)に同じ
- (27) (12)に同じ
- (28) 山口県立下関南高校『六十年の歩み』 一九六六
- (29) 山形県立谷地高校『六十周年記念誌』 一九八一
- (30) (17)に同じ
- (31) (19)に同じ
- (32) (7)に同じ
- (33) (6)に同じ
- (34) (12)に同じ
- (35) 新潟県立柏崎常盤高校『創立六十周年記念誌』 一九六三
- (36) (14)に同じ
- (37) 栃木県立足利女子高校『創立七十周年誌』 一九七九
- (38) 岡山県立和気閑谷高校『創立三百年記念誌』 一九七三
- (39) 宮崎県立小林高校『記念誌 創立60周年記念号』 一九七三
- (40) (11)に同じ
- (41) (5)に同じ
- (42) (1)に同じ

- (43) 新潟県立長岡大手高校「80年のあゆみ」 一九八二
 - (44) (11)に同じ
 - (45) (8)に同じ
 - (46) 福岡県立朝倉高校「創立五十年史」 一九五九
 - (47) (1)に同じ
 - (48) 東京都立富士高校「創立六十周年記念誌」 一九八一
 - (49) 神奈川県立平塚江南高校「創立五十年史」 一九七三
- 本研究は、新井淑子(埼玉大)、館かおる(お茶の水女子大)、西村絢子(日本女子体育大)との共同研究の一部である。

(山 本 礼 子(本学教授) 福 田 須美子(成城短期大学非常勤講師))